

「北朝鮮の新型弾道ミサイル発射と金正男氏の暗殺事件」 2017年02月20日
2月12日、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）は新型の固形燃料による弾道ミサイルを打ち上げた。二段式発射なので、固定した発射台が不要で、いつでも、どこからでも発射できる。今までに、長距離、短距離の種々の弾道ミサイルや、潜水艦発射弾道ミサイル（SLBM）にも成功している。5回の核実験を行い、核弾頭を搭載すれば、朝鮮半島だけでなく、世界中どこでも核攻撃できる状態に近づいている。北朝鮮の核、ミサイル開発については、下記のように捉えられる。

米ソの代理戦争と言われた朝鮮戦争は、1953年に38度線の板門店で休戦協定を結び、休戦状態にある。北朝鮮は休戦協定を平和協定に変更することを求め、一貫して、米国に北朝鮮の存在を認知せよと主張している。米国は「ならず者国家」と烙印し、一顧だにせず、応答しようとしなない。そればかりではなく、米韓合同軍事演習を毎年、膨大な兵力と火器を費やして行っている。北朝鮮の南下を阻止する演習と言っているが、北朝鮮は演習も大きな脅威と感じていることは確かである。イラク、リビアは米国を中心とした多国籍軍に攻撃され、指導者であったフセイン、カダフィは殺され、現在、両国は收拾のつかない混沌状態になっている。北朝鮮は米軍に攻撃され、イラク、リビアのように滅亡させられるのではないかと恐れている。ならば、国際的な発言権となる核とミサイルを持ち、米国と対等に渡り合いたいと、その開発に特化した軍事国家を目指している。海軍も空軍も実質的に微力で、他国への軍事的侵略は不可能であり、一発の核攻撃に国の存続をかけている。北朝鮮の核実験、ミサイル発射を断じて認めることはできない。しかし、核保有国の身勝手さと核拡散防止が困難な現在、小さく貧しい国が核とミサイルに頼るしかないとする考えも理解できなくはないだろう。

ところが翌13日、金正恩朝鮮労働党委員長の異母兄である金正男氏がクアラルンプールの空港で暗殺され、世界に衝撃が走った。暗殺命令は金正恩委員長が出したと言われている。金正男氏は「弟が私を殺そうとしている」と語っていたそうで、北朝鮮工作員が関わった暗殺であったことは確かなことではないか。異母兄弟とは言え、弟が兄を殺害した訳である。猛毒の薬物を使用し、5秒間で、死に至らしめたと報道されている。白昼に行われた恐怖の殺人事件であった。事件の全容は解明されていないが、不明な部分が残るのではないか。

マタイ福音書は、幼子イエスが生まれた時、ヘロデ王は新しい王の誕生を認めず、ベツレヘム一帯の2歳以下の幼児を殺害したと書いている。この幼児殺害は歴史的事実ではないが、ヘロデ王は嫉妬で妻を殺し、王位を奪われるのではないかと二人の息子を殺害したことは事実である。嫉妬深く、権力の亡者であったヘロデに金正恩は重なって見える。人間の歴史は21世紀を迎えているが、過去の歴史を繰り返しているようだ。

日本は戦争中、国体の護持、即ち、天皇（制）を守ることであれば、国民はどうなってもよいとしていたが、北朝鮮も「金王朝」を守るために、国民は恐怖に怯え、人権もなく、極度の窮乏生活を強いられ、人間否定の悲劇は無残である。

金正恩委員長が兄を暗殺したとすると、彼は思うことを何でもする人物で、核ミサイル暴発の危険もあると、国際社会は思ったのではないか。暴発を止めるような冷静な対応が求められる。北朝鮮は、日本が歩んだと同じ歴史を刻んでいる。悲劇的な敗北をもって、終わるしかないのであろうか。いずれにしても、「金王朝」の終焉も遠くはないだろう。